

ロボット活用案 続々

高松拠点にオンライン大会

四国の高校生、白熱議論



自身が考えた社会に役立つロボットについてプレゼンテーションする高校生
＝高松市

高校生が社会に役立つロボットを考える「ロボットアイデア甲子園in四国大会」が29日、高松市の企業を拠点としてオンライン形

式で開かれた。出場した四国内の各高校の生徒は、自身が考案したロボットの活用場面や導入後の経済効果などについてプレゼンテーションし、画面越しに熱戦を繰り広げた。

ロボットアイデア甲子園は、高校生の柔軟な発想でロボットの新たな活用方法を見いだそうと、日本ロボ

ット工業会（東京）などが開催。四国大会には四国4県22校から138人がエントリーし、書類による審査などを通過した香川、愛媛、徳島の3県から計6人がこの日の発表に進んだ。

県勢は笠田2年の次田航さん、大手前高松2年の矢間大貴さんの2人が出場。次田さんは県内で生産が盛んなピワに着目し、実を大きくするため余分なつぼみを摘み取る摘蕾（とくばい）などを行うロボットを提案した。矢間さんは、さまざまな実験にロボットを活用し、遠隔で管理できるシステムの有効性を説明した。

審査の結果、最優秀賞には松山南（愛媛県）の生徒が選ばれ、3月に東京である全国大会に四国代表として出場する。矢間さんは「ほかの高校生の発表が聞けて

楽しかった。将来は工学系の大学に進みたいので、今後いろいろなことに取り組みたい」と話した。